

## 「政治の観点からみた Wawasan2020」

伊賀 司

時間も限られていますので政治の観点からは、4点に絞って話題提供します。しかし、4点の話題に入る前に、Wawasan2020 成立の政治的背景だけは簡単に確認しておきたいと思います。Wawasan2020 の成立について、穴沢先生から ISIS でノルディン・ソピーなどが政策形成を主導したというお話がありました。Wawasan2020 の成立過程を政局的観点からさらに説明しておけば、Wawasan2020 成立には 1980 年代末の政治的混乱、つまり、UMNO の分裂とかオペラシ・ラランといった政治的事件が関係しています。UMNO が分裂し、オペラシ・ラランに至る過程で華人コミュニティと対立したことにより、BN は 1990 年総選挙で苦戦します。UMNO の分裂でマハティールと袂を分かったトゥンク・ラザレイ・ハムザは新政党の 46 年精神マレー人党 (S46) を結党して選挙に参入します。UMNO 分裂で漁夫の利を得た PAS はクランタン州の州政権を奪取しました。BN は 1990 年総選挙では 53% の得票率しか取れませんでした。そこでマハティール政権は、政府や BN に反発していた人々をも取り込むべく新たな国家ビジョンの Wawasan2020 を発表することになったのです。Wawasan2020 の成立によって、マレーシア社会の雰囲気も大きく変わり、新たに設定された国家目標が人々の間で支持を広げるなかで、1995 年総選挙は BN が大きく勝利しました。Wawasan2020 の成立にはこうした政局の動きがあったことを確認しておきます。

さらに Wawasan2020 の関連情報として、もう一点だけ確認します。Wawasan2020 は 1991 年 2 月のマハティールによる *Malaysia: The Way Forward* と題した演説の内容から発展したものです。Wawasan2020 では、2020 年までに達成すべき 9 つの目標が掲げられました。政治的な目標の 1 つに第三目標の「成熟した民主主義社会」という目標があります。発展途上国のモデルとなるような、合意を重視する共同体志向のマレーシア型民主主義を目指すという目標です。はたしてこの目標が 30 年後に達成されたかどうか、大いに疑問は残るところです。

では、本題に入ります。Wawasan2020 成立から 30 年間で何が変わって、何が変わらなかったのでしょうか。政治の観点から私が特に注目すべきと考える点を 4 つ挙げます。この 4 点は、「アクター」と「構造」に分けられて、2 点ずつあります。アクターの次元からは、①マハティールとアンワル、②政治のシルバー・ポリティクス化、という 2 点です。構造の次元からは、③ BN システムの崩壊と野党連合の形成、④「市民社会」の成長の 2 点です。

まずはアクターの次元からお話します。アクターの1点目として、マハティールとアンワル・イブラヒムが基本的にはこの30年間、いつも政治の中心にいたことを指摘できるでしょう。マハティールは3度 UMNO を離党した男です。最初の離党は1969年です。トゥンク・アブドゥル・ラーマン初代首相によって UMNO を追放されますが、1973年にアブドゥル・ラザク・フセイン第二代首相がマハティールを呼び戻すことで再び UMNO に加わります。二度目は2008年です。マハティールはアブドゥラ・バダウィ第五代首相に自分で政権を禅譲したにもかかわらず、アブドゥラの政策にケチをつけ、2008年総選挙後にアブドゥラ首相に辞任を迫るため UMNO を離党します。その後、アブドゥラが首相を退任してナジブ・ラザクが第六代首相に就任するなかで、2009年に再び UMNO に戻ります。最後は、IMDB スキャンダルを起こしたナジブ首相を引き下ろすため2016年に離党します。マハティールのもう一つの政治的スタンスについていえば、彼は後継者を排除し続けた男でもあります。マハティールによって排除された副首相には、ムサ・ヒタムとアンワルがいます。自分自身が選出に関わったはずのアブドゥラとナジブという2人の首相も追い落としています。マハティールの3度の離党と頻繁な後継者の交代から問うべきは、なぜマハティールが半世紀近くもマレーシア政治で常に中心に立ち続けることができてきたのか、そして、なぜマハティールは政府と一体化した強固な基盤を持つ UMNO から離れ、それと対峙しながら後継者を追い落とすことができたのか、という問いでしょう。比較政治学の制度論的な考え方からすれば、マレーシアは周辺国と比較しても強力な首相権限と政党政治が浸透している国といわれているはずなのに、強大な権力を持つはずの首相に3度も反抗し、UMNO から切り離され正面から立ち向かっても最後には目標を達成したその力はどこにあるのでしょうか。さらに、マハティールと同様にこの30年間、アンワルも政治の中心にいました。1998年にマハティールによって副首相から降ろされ、政府と UMNO から追放された後も野党の中心人物として命脈を保っています。二度の長く続くソドミー裁判でアンワルだけでなく家族や支持者も疲弊したことは間違いありませんが、彼も未だマレーシア政治を動かす中心人物の1人です。Wawasan2020の30年をアクターの観点からみれば、マレーシア政治の中心にいたマハティールとアンワルの個性のぶつかり合いであったといえます。

アクターの次元の2点目が、シルバー・ポリティクスです。アクターの第一点目とも関わるのですが、この30年間はマハティールとアンワルのほかは、少数の限られた政治家が政界を動かしています。主要な政治家たちの年齢は総じて高いです。年齢の高い順から政治家をみていくと、マハティールが95歳、アブドゥラ元首相が81歳、今でも DAP に絶大な影響力を持つリム・キッシャンが79歳。その下がアンワルです。興味深いことに、アンワル、ムヒディン・ヤシン首相、それから PAS 総裁のハディ・アワンは皆同年で73歳です。さらに年齢が下ると、ナジブ・ラザク元首相とアフマド・ザヒド UMNO 総裁が同年の67歳です。彼らより1歳若い66歳がモハマド・サブ AMANAH 総裁です。現在59歳ですが、3日後には60代に突入するのが、DAP 幹事長のリム・グアンエンです。

さらに若くなると 56 歳のアズミン・アリ上級大臣 (兼国際貿易産業大臣) になります。

マレーシアの 2021 年の人口は 3270 万人で年齢の中央値は 29.6 歳です。一方、2018 年総選挙で当選した連邦下院議員たちの年齢の中央値は 55.5 歳です。全人口と下院議員との中央値の間のギャップが 25 歳くらいあります。さらに、政界の舞台回しをしている政治家となるとアズミン・アリがようやく全下院議員の年齢の中央値と同じくらいの年齢となります。政治の中核にいる人物が 60 歳から 70 代である一方で、2020 年 9 月に 20 代や 30 代の若い世代のマレーシア人にアピールしようとして政党のマレーシア民主連合連盟 (MUDA) を結成したサイド・サディックには注目してよいかもしれません。彼は明日が誕生日で 27 歳から 28 歳になります。サイド・サディックが若い世代のマレーシア人を対象に政党を結成したのは、2019 年 7 月に投票年齢を 21 歳から 18 歳に下げる法案が可決されたことの影響を考慮しているからです。選挙制度改革として有権者自動登録システムの整備も大きな影響を与えるといわれています。2018 年総選挙での登録有権者数は 1490 万人であり、約 1230 万人が投票したといわれています。2023 年までに実施される次期総選挙では 18 歳以上の新規有権者や未登録有権者を含めると有権者数が 2270 万人になると見込まれています。投票年齢人口の低下によって選挙権を新たに得た若い世代の有権者が、現状の老人ばかりが主導権を握る政治に変化をもたらすことができるか否かは大いに注目すべきでしょう。

次に構造の次元からみましょう。マレーシアでは興味深いことに約 10 年のスパンで政治変動が起こっています。Wawasan2020 がスタートする直前からみれば、1987 年の UMNO の分裂、1998 年のアンワルの政府・与党からの追放によって火のついたレフォルマシ運動、2008 年総選挙での BN の連邦下院議席数の 3 分の 2 割れ、そして 2018 年総選挙による政権交代、を指摘できます。なぜ、10 年ごとに大きな政治的変動が起こっているのか。これは、選挙サイクルとの親和性が高いと考えられます。そこで選挙と関連づけて考えれば、Wawasan2020 の 30 年間で進行したのは、1970 年代から定着してきた政党システムとしての BN 体制の崩壊でした。BN 体制は、中核政党の UMNO (およびその総裁 = 首相) が圧倒的な影響力を持つなかで、各民族と地域を代表する政党が連合することで国民の総意を代表しているという擬制をとっていました。しかし、2000 年代に入るとその擬制には疑問符がつくことになりました。

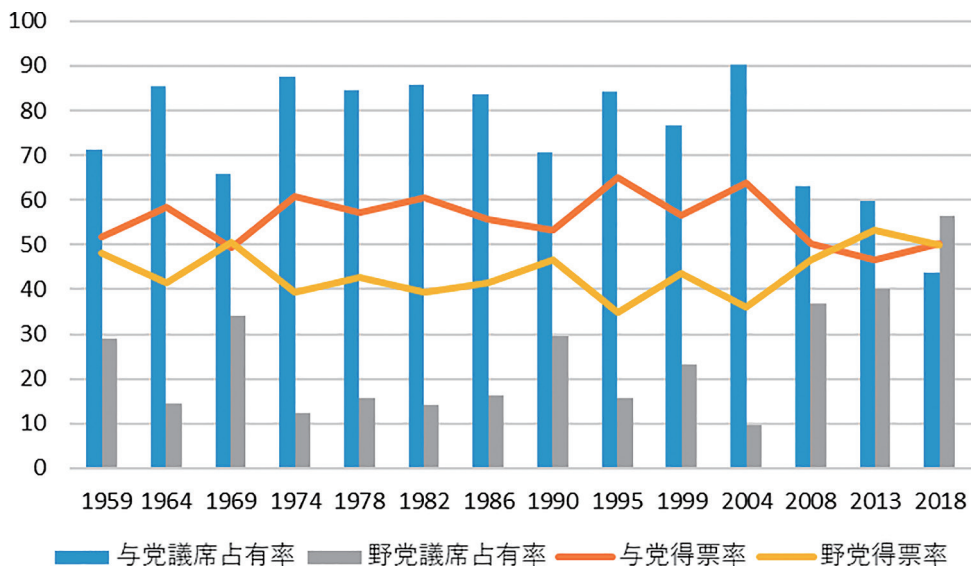
総選挙結果の具体的データをみてみましょう。まずはグラフ 1 からです。小選挙区の制度的要因や選挙区操作の結果を離れて考えるために、得票率から注目します。この 30 年間の BN に注目すると、1990 年総選挙での与野党の得票率の急接近から始まって 1999 年総選挙では苦戦はするものの、1995 年総選挙や 2004 年総選挙では大勝利を収めています。しかし、2008 年総選挙以降は、BN の選挙結果は選挙ごとに悪化していきます。グラフ 1 の得票率だけでなく、議席占有率も同じ傾向を持つのですが、2008 年以降に注目すべきはマレー半島の非マレー人政党です。サラワク州での実質的な華人政党のサラワク統一人民党 (SUPP) も同じ傾向を示しているのですが、マレー半島ではマレーシア華人協会 (MCA)、グラカン (GERAKAN)、マレーシア・インド人会議 (MIC) の非マレー人政党

3 党が 2008 年総選挙以降は壊滅的な議席減少となっています。

連邦下院全議席に対する議席占有率でみれば、UMNO は 1990 年総選挙から 2013 年総選挙までは若干の上下はあっても大体平均して 40% 弱くらいをとっていました。一方の MCA は 1990 年総選挙を除けば、2004 年総選挙までは大体 15% 前後で安定した議席占有率がありました。そして、グラカンが 2004 年総選挙まで 3~4% くらいで、MIC が 2~3% くらいです。しかし、繰り返しますが、2008 年総選挙以降には壊滅的な議席減となっています。こうした大きな変化によって様々な民族や地域から集まった政党によって国民全体を代表するという BN のレトリックは現実に否定されていきました。

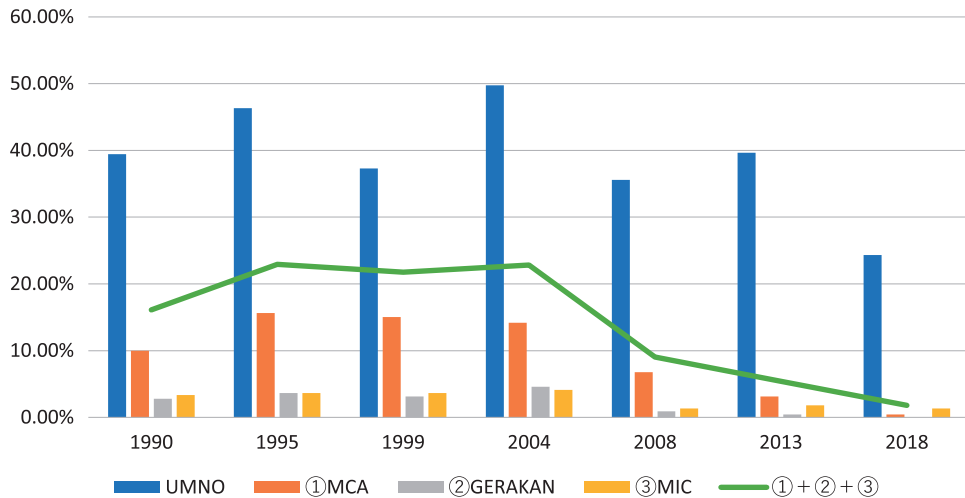
WAWASAN2020 の 30 年間では BN の勢力後退と同時進行して野党連合の結成が何度か繰り返され、マレーシア政治が少しずつ二大政党連合制の方向へ向かっていきました。1990 年総選挙、1999 年総選挙、2008 年総選挙、2018 年総選挙でそれぞれ異なる野党連合が結成されて選挙に臨んでいるのですが、注目すべきは汎マレーシア・イスラム党 (PAS) と民主行動党 (DAP) です。長年野党としての政党政治の経験を積んできたこの 2 党がイデオロギー的な違いを超えて手を結ぶことができるかが野党成功のカギとみられてきました。しかし、2018 年総選挙に臨んだ希望連盟 (PH) は、PAS が抜けた野党連合で選挙前には厳しい戦いなるといわれていましたが、政権交代を果たしました。

もう一つの構造の次元で「市民社会」の成長をお話しします。Wawasan2020 の 30 年間で民族や宗教に基盤を持たない市民社会組織や社会運動が成長し、大規模なデモの動員を行う事例がみられるようになりました。特に 2000 年代に入ってから、選挙制度改革を求めて数万人規模のデモを首都圏で 5 回も起こしたブルシ運動や、パハン州のレアアース精製に関わる環境問題で数万人を集めたヒンプナン・ヒジャウの運動が注目されており、



図表 1 1959 年以降のマレーシアの選挙結果

出所：ECFM (1960)、ECM (Various years)



図表2 1990年以降のマレー半島のBN主要構成政党の議席占有率

出所：ECM (Various years)

制度改革や環境が一般のマレーシア人にとっても重要な 이슈に成長したといえるでしょう。こうした非民族的・非宗教的な運動の動員が可能になった要因として、ウェブメディアによって新たな情報源や情報の拡散手段が登場し、民主的空間が拡大したことを指摘できます。

最後に将来の展望についてつけ加えます。まずアクターの次元では、マハティールとアンワルの2大巨頭の政治がいつ終わるかは注目ポイントの一つでしょう。マハティールは95歳になっても現役を続けており、果たしてあと何年マハティールが政治を続ける、あるいは続けられるのかは興味を引くでしょう。マハティールが死んだ後という意味でのポスト・マハティールの時代には、誰が首相交代の引導を渡すのかは重要な視点になってくると思います。権限や利益配分可能なリソースの観点からみれば、マレーシアの首相は他の新興国の首相や大統領と比べてもかなり強い構造的権力を持っているといえます。実際にPH前政権は憲法改正で首相の任期を制限する改革を導入しようとしたのですが、2020年2月の政変でPHが政権を失ったことで頓挫しました。過去のアブドゥラ第五代首相とナジブ第六代首相はマハティールの様々な妨害もあって首相の地位を失ってしまいました。今後の首相は就任するときだけでなく、誰によってどのように辞任に追い込まれるかを考えることも面白いでしょう。

シルバー・ポリティクス観点からは、投票年齢の引き下げが政治変化につながるのかが重要なポイントになるでしょう。1980年代から2000年代にかけて生まれたY世代からZ世代の世代動向が重要です。これらの世代がサイド・サディックの結成したMUDAにどう反応するのかに個人的に興味を持っています。

構造の次元では、民族別の政党支持動向がどうなるのかが注目です。マレー半島での非マレー系の支持は現在DAPが独占状態に近いですが、今後もDAPへの非マレー人への支

持が大きく変化することは考えにくいのではないのでしょうか。特に野党時代の UMNO と PAS の同盟、それに対して何も言えない MCA や MIC をみている華人やインド人の支持が 2008 年以前のように BN に戻るとは考えにくいです。もっと注目なのはマレー人の支持動向です。現在では同じ与党のなかにマレー半島のマレー人を主な支持基盤とする UMNO、BERSATU、PAS の 3 党が共存しています。この 3 党は果たして選挙区調整ができるのでしょうか。PAS と他の 2 党との関係は悪くはないですが、UMNO と BERSATU の間の関係は非常に悪いです。ペラ州では UMNO と BERSATU の地方組織での対立が先鋭化し、ちょうど今日、BERSATU 所属の州首相の辞任に至っています。草の根の党組織レベルでの UMNO と BERSATU の対立は非常に深刻です。

「市民社会」のスペースについていえば、PH が政権を獲得した後に拡大する気配がみえたのは確かですが、2020 年 2 月の政変で PH 政権が崩壊した後は非常に低調になってきています。コロナで活動制限令が施行されたこともそれに拍車をかけているでしょう。

最後に 1 点だけ指摘すれば、次期選挙がいつになるのかが最近の重要なポイントになっています。ムヒディン首相はコロナの影響がなくなれば総選挙に打って出るとしていますが、果たしていつになるのかはわかりません。しかも、先ほど申し上げたように草の根の組織レベルでの UMNO と BERSATU の対立が先鋭化していることもあって、選挙は与党内の対立をおおるかもしれません。そうすれば、ムヒディン首相にとって本当に選挙実施が得になるかどうかはわからないのが現状だと思います。

(いが・つかさ 名古屋大学)